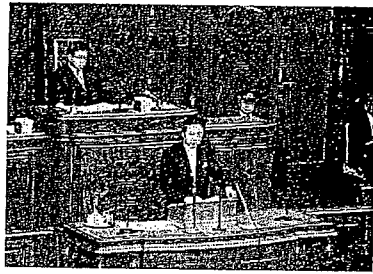


クロス
アップ



公共事業費の大幅減などを柱にした10年度政府予算案が、通常国会で審議に入った。この予算が成立すると、「コンクリートから人へ」という鳩山政権の政策理念がいよいよ実施段階に入るわけだ。日本の公共事業は大きな転換期を迎える。公共工事市場が一段と縮小することにあきらめムードさえ漂いつつある建設業界だが、そうした政策キヤッチフレーズが独り歩きしてしまつことに警戒感を強める関係者は多い。各界識者の主張や建設業界の声を集めてみた。

10年度政府予算案に盛り込まれた公共事業費は、前年度比18・3%という大幅な削減で、これに対し社会保障費は9・8%増、文教科学費は5・2%増となっている。昨年末、鳩山由紀夫首相は政府予算案の概要を発表した会見で、「命を守る予算」「コンクリートから人へ」との理念を貫いた予算案だと強調。先月29日に行った就任後初の施政方針演説では、「コンクリートから人へ」の言葉をあらためて使い、教育と科学に予算を大きく振り向けていく方針などを説明。めりめりを利かせた予算編成ができたことを「政権交代の成果」と訴えた。

昨年10月、鳩山首相が臨時国会の所信表明演説し上写真①で「コンクリートから人へ」の基本理念の下で予算配分の転換を図ると表明して以降、関連業界などからは、抽象的で誤解を招きやすい表現だとして困惑の声が上がっている。

「社会資本はわれわれの血と汗と涙の結晶であり、苦勞を重ねて作り上げている。もう少し（事実を）理解して述べてほしい」（山田恒太郎東京建設業協会会長）

「コンクリートの社会的有用性を否定するもので、コンクリート関連で働く人々の誇りを傷付けている」（武蔵一中小企業組合総合研究所代表理事）

このキヤッチフレーズをめぐる、具体的な要望活動に乗り出し

コンクリートから人へ 独り歩きに警戒感

社会資本整備の本質議論を



形成に基づいて社会基盤整備を推進していくべきだとする緊急提言を共同で発表した。同委員会の濱田政則委員長（早大教授）らは記者会見で、このキヤッチフレーズを「極めて乱暴な標語」と断じ、「人間重視の社会基盤整備」という趣旨にふさわしい内容へと変えるよう求めた。

建築家の香山壽夫氏（東大名誉教授）は日刊建設工業新聞社のインタビューで「コンクリートだつて必死につくっている人がいる。単純な二項対立の図式で比較する文化性、精神性はおかしい」との考えを示している。

鳩山政権の閣僚や与党議員らはこのキヤッチフレーズをどう解釈しているのか。

近畿地方の生コンクリート関連協同組合など16団体から要望を受けた辻元国交副大臣は、キヤッチフレーズの変更について「言葉は難しく、誤解を生むこともある。副大臣会議で提案する」としたが、その後も業界の要望はかなうことなく現在に至っている。

亀井静香金融・郵政改革担当相は昨年12月の講演会で、「言葉は適当ではない面もある」としつつも、「何もコンクリートが要らないと言っているのではなく、人間を大事にしていくという気持ちで表徴したものだ」とその真意に対する自身の解釈を披露した。

鳩山政権としても、このキヤッチフレーズが関連業界などに与り深刻なアレルギー反応を引き起こしてしまつことは本意ではないとみられる。「コンクリートから人へ」の表現に固執することなく、これからの社会資本整備について本質の議論が行われることが求められている。

日本学術会議土木工学・建築学委員会、土木学会、地盤工学会、日本コンクリート工学協会の4団体は先月中旬、科学的根拠と同意

建設産業に詳しいある民主党議員は「コンクリートから人へ」